

# Rômazi no Nippon

ことばともじの研究

2012

Natu



## Mokuzi

近代における日本と中国の言語文字改革運動	・・・ 田中 信一	1
老いのつぶやき (7)	・・・ 杉本つとむ	8
Wakaranai 方言	・・・ 宮島 達夫	11
翻訳について思うこと	・・・ 松村 一登	15
通訳としてのロブシャイト	・・・ 照山 直子	20
怪談から聴こえてくる音 —「耳なし芳一」を中心に—	・・・ 富塚 博之	27
日本語の音の変化をしらべてみよう —ローマ字をつかって—	・・・ 浜野 豊美	32
eラーニングの日本語教育	・・・ 饗庭 朋子	37
韓国におけるハングルと漢字	・・・ 牧野 浩也	43
漢字から草 (sô) のかなへ	・・・ 竹端 瞭一	49
日本式ローマ字運動の旗をかかげて インターネット「ローマ字ネットの会」がスタート	・・・ 清水 正之	54
書評 田中信一著『中国言語文字現代化の推移 1949年～1995年編年史』	・・・ 茅島 篤	59
紹介 宮脇弘幸監修・前田均解説『南洋群島國語讀本補遺』	・・・	62
HEINE no Uta —「亀の子文字」もRômazi?—	・・・	63
ローマ字 Iroiro	・・・	64
Nakama no Pêzi	・・・	65
NRS教育部 (旧NRKK) 研究大会開催要項	・・・	82

\*表紙の人 前島 密

表紙裏

# 翻訳について思うこと

松村 一登

私は大学で外国語の研究を専門にしているが、いわゆる実用語学の世界に身を置いている人間ではない。ただし、フィンランド語やエストニア語というあまり多くの人が知らない言語が専門なので、頻繁ではないが、通訳や翻訳を頼まれて引き受けることがある。とくに通訳は面白くて、フィンランドの国会議員団の来日の際の国会議長の通訳（フィンランド語）とか、成田空港の税関で摘発された違法薬物の密輸未遂犯の、空港警察や千葉地検での取り調べの通訳（エストニア語）まで経験した。大した失敗がなかったようなのは幸いである。国際学会での研究発表や、分科会の司会は英語でするので、英語もそこそこ出来るつもりなのだが、英語のそういった仕事は私には回ってこない。京都祇園のお茶屋でのお遊びに付き合わされたり、政権党の政党本部に同行したりなど、ふつうならとてもありそうにない体験ができたのも、マイナーな外国語を知っているおかげである。

今年（2012）の2月、私は、エストニアの首都タリンで、日本大使館の主催で行われた東北振興と日本への観光誘致のイベントで、エストニア語の講演を2つ依頼され

た。日本語でさえ講演は数えるほどしか経験がない人間だから、講演としての出来がどうだったかはまったく自信がない。ただ、幸か不幸か、日本の大学関係者でエストニア語で話のできる人間はほとんどいないので、完璧には程遠かったとは思いますが、とりあえず及第点はいただけたのではないかと勝手に思っている。

2つの講演のうちの一つはタリン大学で行い、日本語を学んでいたりする人たちが対象だったので、蕎麦と日本文学を主たるテーマに選んだ。エストニアにビールで有名なサク（Saku）という町があって、長野県の佐久市と姉妹都市になっている。佐久地方には「草笛」という蕎麦屋があり、本店は小諸の懐古園の入り口脇にあるが、小諸と縁の深い島崎藤村の「千曲川旅情の歌」の中に登場する「佐久の草笛」がその名前の由来という（「草笛」中村利勝社長による）。また、佐久には「草笛」という蕎麦焼酎（戸塚酒造）もある。ここで、太平洋戦争末期に佐久に疎開し「佐久の草笛」という詩集を出した佐藤春夫に話をつなげれば、交友関係から、川端康成、太宰治、三島由紀夫という、エストニアでも作品が翻訳されて

名前が知られている日本の作家を話題にすることができる。あとは強引に村上春樹、東野圭吾、宮部みゆき、角田光代など、作品の英訳があり、映画化もされている人気作家の話もできてしまうという、きわめて大雑把な構想になった。

もうひとつの講演は、駐エストニア日本大使の公邸で行われ、エストニアの国会議員や、日本とビジネス上の関わりのあるエストニアの実業界の人々、日本に来る前の把瑠都（カイト・ホーベルソン）を育てたエストニア相撲協会の役員、マスコミ関係者などが聴衆の中にいた。震災後日本を訪れた外国人観光客数の推移などを示す公式の統計数字とグラフを見せたあと、昨年（2011）、震災直後の連休に行った東北旅行で撮った写真などを紹介しながら、東北の観光名所や名産品などについて話した。

タリンの日本大使館の担当者との間で、およそどういうテーマで話せばいいのかの打ち合わせができてから、出発まで4週間程度の準備期間があった。十分な時間のように見えるが、蕎麦やサクラのようなものはエストニア語にも定着した呼び名があるものの、少し踏み込むと、エストニア語で何と言ったらいいのかわからないような、日本独特の風物ばかりなので、この講演のために訳語を考案する必要があることに気づいた。日本の小説でエストニア語訳されたものの多くは手元にあって、エストニア語のタイトルくらいはすぐに分かるが、それ以外の文物の多くは、おそらくこれまで

エストニア語ではきちんと紹介されたことがないから、決まった訳語などないと思ったほうがいい。

日本語のできるエストニア人に聞けばいいのではないかと思う人がいるかもしれないが、そんな簡単なものではない。エストニア語ができて、実物を見聞きしていなければ、エストニア語で何と呼べばいいかわるはずがないので、頼りにはできない。こういった場合、日本語からの翻訳の伝統のある英語なら、分厚い和英辞典があつて、ずいぶんと助けになるのだが、エストニア語には日本語との対訳辞書はまだない。したがって、英語・ドイツ語・ロシア語・フィンランド語など、自分が知っている外国語と日本語、ないしエストニア語との対訳辞典の助けを借りることになった。さいわい今は、インターネットが利用できるから、Wikipedia の画像入りの記事も大いに参考になったが、いずれにしても、いくつもの出典を複合的に参照しないと、ぴったりしたエストニア語に辿りつけないし、ときには適当な訳語が見つからないまま、?付きにしなければならぬこともおこる。まさに「蘭学事始」の世界そのままである。

エストニア語では蕎麦を *tatar* と呼ぶが、語源は「タタール」だから、日本でいう「韃靼そば」に通じる呼び名である。韃靼そばのエストニアでの食べ方は、基本的にロシアのカーシャと同じなので、蕎麦ごめ (*tatratangud*) から作る蕎麦がゆ (*tatrapuder*) ということにし、蕎麦きりは「蕎麦

のヌードル」(tatranuudel)とした。そば粉は、小麦粉(nisujahu; nisu 小麦)にならって tatrajahu と呼ぶことにし、蕎麦がきは、マッシュポテト(kartulipüree; kartul ジャガイモ)をまねて tatrapäree にしてみた。そば湯は、蕎麦の茹で汁(tatra keeduleem)ということになる。このほか、そば茶(tatratee), そば焼酎(tatraviin; viin ウォッカ)など、多くのものがおそらくエストニア初紹介だったと思われるが、訳語は、スクリーンに画像と一緒に映し出したので、おおよそのイメージはつかんでもらえただろうと思っている。ちなみに、エストニア人だけではないと思うが、米から作る酒は醸造酒の sake (riisivein; vein ワイン) だけだと思っている人ばかりなので、蒸留酒の米焼酎(riisiviin 米のウォッカ)があると話すと驚く人もいる。

「佐久の草笛」の訳も困った。なにしろ、ふつうに言われている草笛と違わないものだろうと想像するだけで、どういう笛なのか本当のところはよくわからない。蕎麦屋「草笛」の中村社長によると、明治時代に、草笛を好んで吹く落ちぶれた武家の姫が主人公の物語が、和綴じ本で出回っていたのだが、今はすっかり忘れられて、もう手に入らない。社長自身も、昔神田の古本屋で偶然見つけたのを買ったという。島崎藤村は、小諸でこの物語を読んだに違いない。「千曲川旅情の歌」では次のように歌われている。ここだけエストニア語訳してみたが、直訳だからあまり自信はない。

暮れ行けば淺間も見えず  
歌哀し佐久の草笛

Õhtupimeduses ei näe Asama-  
mäge,  
Murelikult kostab Saku lehepilli  
laul,

私は草笛を lehepill (葉の笛)としてみた  
が、聴衆のひとりから suupill (口の笛)の  
方がいいという意見が出た。後で、エスト  
ニア語の国語辞典で suupill を調べてみた  
が、サッカーの審判の吹くホイッスルのこ  
とだとしている。一方、私の訳でまったく  
問題ないとする友人もいる。

その後4月になって、小諸に立ち寄る機  
会があったので、蕎麦屋「草笛」で蕎麦を  
食べ、懐古園の中にある藤村記念館を覗い  
たところ、「千曲川旅情の歌」のフランス語  
訳が展示されていたから面白い。「佐久の草  
笛」の出ってくる箇所フランス語訳はこう  
なっている。

Puis c'est le crépuscule: l'Asama  
n'apparaît plus,  
De Saku un pipeau gémit sa  
mélopée,

藤村の知り合いのフランス人が訳したも  
ので、この翻訳はフランスでも紹介され  
たらしい。「草笛」の訳 un pipeau は、手元  
の仏和辞典では「鳥笛、野笛」となってい  
るが、フランス人はどんな笛をイメージす

るのだろうか。

大使公邸で行った講演では、津波から 2 ヶ月も経っていない三陸海岸の北部 (岩手) で写してきた海岸の写真を見てもらったが、災害を描写する語彙は日本語もエストニア語も原則変わらないからとくに難しくはなかった。しかし、蕎麦や草笛と同様に悪戦苦闘したのは、ワカメ、ノリ、ウニなどの海産物、サクラ、さらには、武家屋敷 (角館) や映画村 (鶴岡) などの紹介のためのエストニア語の語彙の選定である。

エストニア語では、ワカメもノリも海藻 *merevetikas* (*vetikas* 藻) と呼ぶしかない。種類の違う海藻と説明だけで、あとは *wakame* と *nori* で通してしまった。エストニア語に訳そうとして気づいたのだが、生ワカメは、生ではなくて実は「茹でワカメ」 (*keedetud wakame*) だし、生のノリもまるっきり生ではなくて「醤油で味付けしたのり」 (*sojakastmega maitsestatud nori*; *sojakaste* 大豆ソース) である。わかめ汁は「ワカメ入り味噌汁」 (*wakamega misosupp*)、板のりは「乾し海苔」 (*kuivatatud nori*) にした。

ウニは、エストニア語で「海のハリネズミ」 (*merisiilik*; *siil* ハリネズミ) と呼ぶらしい。これでは美味しそうにないので、料理の説明では *uni* で通すことにした。ちなみに、*uni* というと、ドイツ語では「大学」を意味する略語 *Uni* だし、エストニア語では「眠り、夢」の意味である。うに井

は「ウニのトッピングのご飯」 (*unikatusega riis*)、焼きウニはそのまま *grillitud uni* と呼ぶことにした。

エストニアにはない「映画村」の訳も困って、「野外の映画スタジオ」 (*vabaõhu filmistuudio*) ということにした。野外セットの「水車小屋」は、エストニアにもぴったり相当する *vesiveski* (*vesi* 水; *veski* 粉ひき場) がある。同じく野外セットの「漁村」は *kaluriküla* (漁師集落; *küla* 集落) とすればいいが、「宿場」はうまく訳せなかった。今から考えると *postijaamaküla* (郵便駅集落) などとしてもよかったかなと思う。

仮想現実 (VR=virtual reality) の一種に拡張現実 (AR=augmented reality) というものがある。目に見える現実世界に、付加情報をかぶせた拡張世界だが、私たちはふだん、日本語の付加情報がかぶさった拡張現実の世界を日本の文化風景として見ていると考えられる。この拡張現実の日本語の付加情報をエストニア語の付加情報とそっくり取り替えれば、日本語からエストニア語への翻訳ができると考えられる。

言語相対論というのは、拡張現実を作っている付加情報に完全な互換性がないために、言語が違えば、世界が少しずつ違って見えるという考え方である。この考え方に立つなら、母語以外の言語の知識をもつ人なら、その言語数に応じた拡張現実で、この世界を幾通りにも経験することができる

ということになる。

こういった考え方については賛否両論があるが、使う言語を取り替えると、メガネを取り替えたように、少しずつ違う世界を体験することができるという考え方には魅力がある。ネット上のいわゆるサイバースペースも、Wikipedia を見ると、ある事物についての項目は非常にたくさんの言語で読むことができるのに、別の項目は書かれている言語が極端に少なかったり、同じ事物に関する項目なのに、言語によって内容が随分と違うと感じられることがしばしばある。自分が知っている少数の言語の間でさえそうなものだから、それ以外の知らない言語の項目を読めば、もっと多様な世界が見えてくるに違いない。

対訳辞書を作ることは、2つの言語の間の翻訳の仕方について、ある種の約束事を社会的に決めようとする事だと考えられる。言い換えると、拡張現実に異なった言語で付加されている情報の仕様を統一しようとする試みである。対訳辞書を共有する翻訳者たちの翻訳のほうが、共有する対訳辞書のない翻訳者たちの翻訳と比べ、相互に似ている度合いが大きいはずである。たとえば、日本人が英語を学習するときに使う英和辞典や和英辞典は、明治のころからの翻訳の実績で培われた約束事が凝縮されていて、この膨大なデータベースを日本人は学校で頭に叩き込まれる。これに対して、エストニア語と日本語のように相互の翻訳の歴史が浅くて、簡単な対訳語彙集がある

だけで本格的な対訳辞書がない言語の間では、翻訳を行うそのときそのときで、訳語を最初から考えるから、同じ翻訳者でもその時々で違った翻訳になってしまうことも少なくないだろうと思われる。

このほど、ある出版社から、私が20年前にエストニア語を教え、今はエストニアに住んで大学でエストニア人に日本語を教えている女性との共著で、簡単なエストニア語の旅行会話帳を出した。著者の間でそれぞれの担当部分の原稿を読み合い、訳語についての意見交換も行ったので、これは、エストニア語と日本語の間の実用的な翻訳における約束を作るためのひとつの提案になっていると思う。個人的には、エストニア語と日本語の対訳辞書を作ってみたいのだが、望みが叶うかどうかわからない。

(Matsumura Kazuto 言語学者, 東京大学)

### Nippon-no-Rômazi-Sya の出版物

龍岡博著 A5 判 65p 1800 円  
**Rômazi (ローマ字文の書き方)**

ローマ字のつづり方から分かち書きのしかたまで何でも分かる 21 世紀のローマ字教科書。朝日新聞「天声人語」のローマ字訳を多数掲載するなど例文も豊富。

大橋富貴子著 新書判 120p 2200 円  
**大橋先生のローマ字教室**

お茶の水女子大附属小学校で長年国語教育に携わった著者による肩のこらないローマ字入門。楽しい読み物を通じて自然にローマ字の世界にいざなう。

送料各 80 円 ご注文はメール、FAX などで  
zika ni 日本のローマ字社へお願いいたします。